

## 明大サークル物語



# 紫雲塾古武道部

「何部ですか」と問われて「紫雲塾古武道部です」と答えると、皆決まって興味と疑問の色を浮かべる。「何をやる部なのか?」と。

沖縄が古代琉球王国だった頃から現代に伝えられている琉球古武術・空手を、我々は日々学び、鍛練している。明治神宮に奉納もしている由緒ある琉球古武術の、あくまで一部を今回紹介するが、本誌を読んで関心を抱いて頂ければ幸いであり、さらに体験したいと思って頂けたなら、これ以上嬉しいことはない。

執筆者:井上 貴勝(師範)、遠山 衛(OB会会長)、増淵 淳一(監督)、  
鬼頭 良太(理工学部4年・主将)、小山 優作(農学部4年・主務)、荻原 雅之(農学部3年)

## 古武道部の魅力

主務・小山優作

先に述べた通り、我々は琉球古武術と徒手術である空手を学んでいる。琉球古武術とは武器術を指し、棒や

ヌンチャクの他、トンファーというT字型の木製武器や、釵(サイ)という十手に似た三又の金属武器など、全ての武器の網羅はできないが実に多くの種類を扱う。これらを自在に操る自分を夢見て入部した人も少なくない。私もその一人だったのだが、入部者のほとんどが武術とは無縁だった人々だ。皆同じスタート地点から始め、お互いだけでなく先輩の姿も見て、自分も負けじと切磋琢磨していく。右も左も分らない状態の中、OBを含む先輩達は親身に、時に厳しく指導してくれる。一つひとつを吸収することで、余計な力が抜け始め、動きの意味やコツがわかってくる。すると一気に面白さが増してくる。より速く動くためには、

より強く突き蹴りを出すためにはetc…。先生先輩に尋ねたり、文献や動画を参考にしたりと自ら積極的に動くようになる。そうした向上心、積極性はきっと部活動のみならず、将来の大きな糧になるだろう。

また、武道部であるので礼儀作法についても学ぶ。目上の人との接し方や連絡の取り方、宴会の進行などを教わる機会には、他では中々恵まれないと思う。先生やOBと向き合った時の緊張感や言葉遣いは、社会に出るにあたり貴重な財産と武器になる。

紫雲塾古武道部の信念は「自主独立」である。部で学んだことを社会でも生かせるように人間を育てることが、我が部の伝統であり誇りでもある。新しいことを始めたい人、自身を持って胸を張れるものを探している人、質実剛健を目指す人達を、強く逞しく育ててくれるだろう。



徒手の組手



棒の十五本組手中の現主将(鬼頭)と増淵監督

## 部の活動内容

主将・鬼頭良太

我が部の活動内容として、徒手である空手と武器術を並行して練習をしている。どちらとも基本の突き蹴りや使い方から約束組手、型を上級生から下級生に指導するというスタンスで行っている。

主な活動日は月々木曜日の昼休み一時間と金曜日の夕方から二時間、それぞれ生田の格技室を利用して稽古に励んでいる。また、火曜日の夕方からは渋谷にある蔵修館総本部道場で琉球古武術保存振興会会長である井上貴勝先生から直接指導を受けている。そして、夏・春休みにはそれぞれ強化練習・合宿を行い、夏季合宿に於いては、静岡県清水支部で清水の先生方から迫力のある指導を受けて、空手本来の受け方や捌き方を実感することが出来る。

この練習成果を基に、披露する場所として11月に明治神宮奉納演武大

会や生明祭、4月には浅草日本古武道大会が毎年行われており、我々の日々の努力を精一杯発揮出来る場が数多くある。特に、明治神宮演武会や浅草演武大会は、他の古武道の流派も出場しており、我々はその一つの琉球古武術の流派の会員としての自覚を持ち、演武に望んでいる。

ところで、我が部は他の支部会員と接することが出来る、グローバルな交流の場がある。一昨年には国際演武大会という保存振興会の国内、国外支部会員が集まる行事が行われ、そのレセプションでは色々な支部の方々と触れ合えた。また最近では、我々の練習に外国会員が参加する、ということも多くなってきており、このように、国際的な交流は他部では出来ない、我々の利点でもある。

## 創部の頃

(部の歴史・創部の経緯)

OB会会長・遠山衛

昭和49年、工学部(当時)・農学部



浜比嘉(はまひが)のトンフナーと呼ばれる型



浜比嘉の釵と呼ばれる型



当山(とうさん)の二丁鎌と呼ばれる型

# 紫雲塾古武道部

の3年生5名が、吉形先輩(初代監督)始め多くの先輩方にお力添え頂き、会長に小笠原清信先生、部長に水谷学先生をお迎えして紫雲塾古武道部を立ち上げた。発会式は10月1日である。

何を稽古するか決めないままに部を始めた我々に対し、小笠原先生は「明治神宮奉納演武会を見学し、習いたい流派があれば申し出るように」と言われた。お言葉に従って見学していた我々は、井上元勝先生の演武を拝見した途端に「これだ」と確信し、報告した。小笠原先生はその場で井上先生にお願いして下さり、井上先生も快く引き受けて下さった。当時、琉球古武術は空手の有段者を対象に教えており、我々にはその資格がないと知ったのは後日のことであるが、井上先生は「小笠原先生から預かったのだから」と意に介さないご様子だった。

あれから37〜8年、ここまで続いた第一の理由は、良き先生に巡り合

えたことであろう。小笠原先生、井上先生、水谷先生は何れも故人となられたが、古谷英二先生、井上貴勝先生、森下剛先生のご指導の下、益々の精進を期待している。

## 今後の抱負

主将・鬼頭良太

今後の抱負として、私たちは先生の教えである「心・技・体」の気持ちを持って、これからも努力を続け、精進していきたいと思っている。また、先生方、先輩方はもちろんのこと、外国支部の会員や対外の部との交流によって、さらに部員各々の志を飛躍させられるような部でありたい。そして、一番の目標としては、大学の四年間に「紫雲塾古武道部」に入って良かった、と思えるような活気ある、楽しい部にしていきたいと思っています。



明治神宮奉納演武大会



OB 会長・遠山 衛

# 紫雲塾古武道部

## 師範の御言葉

明治大学紫雲塾古武道部師範

井上貴勝

古武道は現代武道の源流であり数十以上の流派が現存する。その中のひとつに琉球古武道がある。七百年の歴史を通じて昇華研究されてきた武器術である。

入部する男女のほとんどは初めて武術に接する。武器術の伝承型、基本の使い方を段階に応じて学習する。特に棒法は白眉の存在である。継続の中で自然と体が動き、武器の扱いに慣れていく。体得と継続の力はすごい。平素の修行、演武会への参加、歴史の学習などを含め心技の修養を図る。

世界で琉球古武術を志す年代も老若男女である。護身術として自らを身を守り、平和な社会を求めて学んでいる。

日本の伝統文化である古武道を通じて各種の御流派の先生方、各部の先

生方並びに知友人の方々、国内外のグローバルファミリーとの交流を育みながら貴重な体験を身につけ成長し、社会に洋々と巣立つ若人のエネルギーをたくましく感じている。

## 監督の御言葉

明治大学紫雲塾古武道部監督

増淵淳一

「4年間続けてよかった」卒業生歓送会での卒業生の感想です。

紫雲塾古武道部に入部したときは、練習についていくのがやっと、何をすることも、右往左往するばかり、そのうち先輩から檄が飛ぶ。「しつかりやれ!」、先輩は怖い。

まず、挨拶(大きい声で)、自己紹介(大きい声で、はっきりと、ハキハキ話せ)、校歌(大きい声で、しっかり手を振れ)、手紙の書き方(手書き)、宴席でのマナー(礼儀をわきまえつつ、楽しめ)、卒業し、社会に出て必要となる基本はすべて学ぶ。紫雲塾古武道部ではこれを一番重視



紫雲塾古武道部監督・増淵淳一  
(昭和56年度工学部卒)



紫雲塾古武道部師範・井上貴勝



している。

また、入部時の新入生歓迎会では、OB・OGから、「4年間は短いので、何か打ち込めるものを見つけたら、多くのことにチャレンジし、将来の可能性を広げろ」とアドバイスを受ける。OB・OGは自分たちの経験を踏まえ、後輩たちを暖かく応援している。

古武道の世界へようこそ。入部して、1年目は、これまで経験したことのない世界(古武道の世界)に飛び込み、見るもの、聞くもの驚くばかり。先輩の技に圧倒され、総本部道場で一般の人や指導員、先生の動きは、まさに異次元の動きに感じる。それに少しでも近づこうと日々稽古に励む。3年生になり、後輩たちを指導するようになると、漸く動きの意味を理解できるようになる。そうになると、ますます興味がわき、工夫・研究し、より一層上達する。どうしてもできなかつた動きが、日々稽古を続け、工夫しているとある日突然できるようになる。それは、いつで

きるようになるかわからない。ある日突然できるようになる。その時の気分は最高に嬉しい。これで、ひとつの門をくぐったと感じられる。この気分を一人でも多くの後輩に味わって貰いたいと思う。

## 体同連委員長の言葉

体同連本部委員長

荻原雅幸

私も紫雲塾古武道部の部員ですが、体同連委員長の立場から紫雲塾古武道部について語りたいと思う。この部の素晴らしい点は先輩方(OB)との結束が強い事だ。それは武道を学んでいる人間だから当たり前だという事もあるが、紫雲塾古武道部に対する先輩方の熱い思いが現役部員まで繋がっているからだと思う。今後この熱い思いを途切れる事無く後世に繋ぐのが現役部員の使命だとも思う。



棒術の稽古



棒の組手